

理事長のごあいさつ

理事長就任にあたってのご挨拶



和歌山地域経済研究機構

理事長 足立 基浩

【和歌山大学経済学部長】

和歌山地域経済研究機構は和歌山商工会議所、和歌山社会経済研究所そして和歌山大学経済学部によって創設(1996年)されて以来、和歌山の地域経済を活性化するためのシンクタンクの機能を担う機関として現在に至ります。なお、私事で恐縮ですが同機構が創設された1996年は、偶然にも私が助手として和歌山大学経済学部に採用された年でした。

あれから19年の歳月が過ぎ、私はこの4月から和歌山大学経済学部長に任命され、さらに本機構の理事長をも拝命することになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ところで、私はこれまで地域商店街の再生、中心市街地の再生の分野を研究してまいりました。和歌山の人口は約96万人、しかし、人口減少率が高く、また特に若者の人口減少は全国的にワースト3位以内に入っております。また、書籍の購入額などが低い一方、牛肉の消費量が全国トップであり、トマトケチャップの消費量1位ということで全国的に脚光を浴びることになりました。また歴史的に高いといわれる貯蓄率と、低い小売店の売上額(=県内消費)が反比例するかのように経済を特徴づけています。1人から4人までの小企業が多いのも特徴といえます。

さて、私は和歌山地域経済研究機構との関係の中で和歌山県内のデータ分析と特にその「類型化」や「理論化」について取り組んでまいりました。中でも経済学の巨匠ケインズが指摘したように、こうした現象やデータを理論的、統計学的、哲学的等様々な視座から解釈する必要があります。

こうした視点から少し和歌山経済を見てみましょう。

まずは「理論的な視座」についてです。

私は地方経済を分析するときにまず大事なのが「産業の活発度合い」とみています。産業、つまり企業がないとそこには人が住み続けることができません。その結果、街もできないのです。これは都市経済理論で著名なローリーが1968年に指摘した通りです。産業でも特に外部からの資金を稼げる産業、つまり製造業や観光業などが大事でこれらを基盤産業と呼びます。そして、基盤産業の発達で、非基盤産業といわれている小売業などの産業を発展させます。

和歌山の場合、いわゆる基盤産業が弱い状態が続いています。かつて住友金属の工場が経済再生を支えていた時にまさに、ローリーモデルが当てはまります。つまり、戦後、和歌山経済の基盤となる「鉄鋼業」の繁栄がその近辺の商店街を誕生させ、逆にその衰退が商店街をシャッター通り化させました。つまり、和歌山の再生には商業を含めて基盤産業をどのように再生するのがポイントになってきます。

続いて「統計学的な視座」についてです。

統計学には主に①「分類の統計学」、と②「因果関係を明らかにする統計学」、の主に 2 種類があります。

①の「分類の統計学」では数多くあるデータを、相関性のないデータ群に分類する、という考え方です。一見して関係のなさそうなデータ群（例えば、農業生産額とサラリーマンの給与）でも、実はなんらかの関係性をもってしまっているケースが多いのが実情です。分類の統計学では、こうした関係性を「シャットアウト」して新しい基準を作ってその尺度でデータを見ていきます。私は、以前、和歌山の経済の特徴を示すために分類の統計学の代表である「主成分分析」を用いてその特徴を説明しようと試みたことがあります。結果としては、和歌山県経済は①1次産業を中心とする主成分（＝特徴のこと）、②観光産業を中心とする主成分、そして③移出と移入を中心とする主成分、の3つの主成分が存在することがわかりました。③の「移出と移入」とは国内での生産物・サービスの輸出・輸入みたいなものです。

つまり、和歌山は農林水産業、観光業、そして製品の移出入を中心とする「製造業」の県なのです。この3つの主成分をうまく再生させれば、経済成長は軌道に乗るものと思います。

②の「因果関係の統計学」は、例えば「円安」になればどの程度の「日本の経済成長率は上昇するのか」などのように、原因と結果を方程式で表すものです。

少し古いモデルですが和歌山県の経済関係を説明するのに同時方程式体系モデルというものをを用いて、シミュレーション分析を行いました。その結果、和歌山は県外での消費が多く約600億円の需要不足が発生していることもわかってきました。因果関係を分析して、「原因」にメスを入れることで結果をコントロールする。つまり、次の一手が打てるのはありがたいことです。

最後に「哲学的視座」について・・・。

いわゆる経済学における哲学的思考とは最終的にこの街をどうしたいのか、というビジョンのことです。残念ながら経済学ではいわゆるビジョンについてはあまり強いツールを持っていません。政治的な分野に決定をゆだねることが多いのも事実です。

かつて哲学者ベンサムが主張した「最大多数の最大幸福」はその答えの一つといえます。一方で、少数の幸せな人たちが幸福になって、残りの人たちを徐々に幸せにしていく、という哲学もあります。

この点については「歴史」にそのヒントが眠っているように思います。どんな社会が幸せなのか。そもそも幸せな社会像とは何なのか。私は地方都市がそれぞれこうした哲学を持っても良いと思っています。ドイツ統一を果たしたビスマルクがかつて指摘したように、「賢者は個人の経験からではなく、歴史から学ぶ」という言葉に照らせば、和歌山の歴史を紐解くことで今後の和歌山のまちづくりビジョンのヒントを得られるかもしれません。

和歌山経済研究機構は、実に様々な分析の可能性を秘めています。経済現象は複雑ですが、ゆえにやりがいがあります。私も一研究者として今後も分析・研究の一端を担うことができたら幸いです。